

空踏市の醜聞

大村伸一

*世界のおわりのまち ～ ありけり博士の手記より

その駅の近くには処刑場があつて毎月最初の日曜に行われる処刑の日には国の一番遠い地方からも大勢が見物に訪れる。駅の東には処刑の前に祈ることを許された者のための特に大きな処刑場があり、そこで自らの死と引きかえに無心に祈りを捧げる受刑者の姿はとりわけ人気が高い。彼らの祈りの言葉が聞こえる最前列のチケットとなると手に入れることは難しく、自分の体の一部だけでもその席に着かせたいという者のために用意された比較的安価な席には、客たちが自らえぐり出した眼球が前日からうず高く積み上げられている。眼球に混じって、切り取られた指や舌もあるのだが、なぜ指や舌を席に着かせるのかその真意は分からない。

チケットの番号が特定の数字である者には受刑者に一つ質問をすることが許されている。渡されたカードに質問を書き担当者に渡すと、受刑者自身によって回答の書き込まれたそのカードが処刑の後、質問者に返される。受刑者の中にはカードに書かれた質問の文字を見て、それが自分の母親の文字だと騒ぎ立て面会を要求する者もいるが、それが許されたためではない。処刑に関する不正は特に厳しく罰せられている。

秘密であるはずのその質問と回答は本にまとめられ処刑場の売店で売られているという噂がずいぶん昔からあるのだが、その本を見たという者はこの町にはいない。

あまり知られてはいないが、チケットの番号は受刑者自身の手書きであり、受刑者の数えられる最大の数までのチケットが発売されることになっている。受刑者の中には数字は無限にあると言い出すものもいて、処刑場職員の失笑をかっている。

*もつものと持たざるもの

駅周辺の土地はもともとはへりた氏の所有であり、駅周辺の処刑場は今でもへりた氏の所有物である。それでも国がへりた氏に処刑に関する権利を譲渡するといったことはなく、へりた氏は処刑の執行について何も関与していない。ただ、へりた氏には処刑場の売店の売上げの幾許かが支払われ、毎月最前列のチケットが二枚支給される。

その二枚のチケットはへりた氏の手に渡るとすぐにへりた夫人に取り上げられる。処刑の日の朝になるたび、そのチケットを手にいそいそと出かけるへりた夫人は、やがて若い男と手をつないで処刑場にやってくる。そして、処刑の間も処刑が終わってからも夫人はその手を離そうとしない。処刑の瞬間に夫人の目に浮かぶ淫らな輝きを見れば、二人がその後どこへ行こうとも結局は同じ事をするのだということが分かっただろう。

その毎月変わる若い相手は夫人の愛人だと噂され、遅くとも翌朝の新聞には男の素性のすべてが暴かれることになっている。そんな羽目になることが分かっているが、へりた夫人の愛人になろうとする男は絶えることがなく、新聞の記事の最後は決まって「あんな女性のどこがいいのだろうか」という、新聞記事にあるまじき文で締めくくられる。

*かい話のはじまり

客車から降りたスーツ姿の女性は処刑場までの道筋を尋ねた。空踏市駅の駅長であるへりくちはそれまで幾万回も尋ねられ答えてきたその質問に簡潔に答えながら彼女の切符の始発が都市であることを確認した。

女性は上着の内ポケットから名刺を取り出しへりくちに渡すと、自分が処刑場の新しい専属医師であることと、処刑場の専属ではあるけれども緊急の場合には協力を惜しまないことを言い置いて、処刑場に向かった。

へりくちは、女の後ろ姿が見えなくなると名刺を上着の右のポケットにしまった。へりくちはこの駅の駅長として赴任して以来、駅舎から外に出たことがなく、処刑場を見たこともなかった。だから、もし緊急の場合になったとしても、果たして処刑場まで辿り着けるかどうかは分からない。せつかく知り合いになれたというのに、みけもというあの女医にはもう二度と会うこともないのだろうと、思った。

*くう中にひそむもの

「ふみなの真似なんか誰もできないさ」

そう言ってサーカスの団長が見上げた空中には、ブランコから手を離し、天井すれすれの空間に静止したままゆっくりと回転しているふみながいた。

「半日もああしてるんだ。夕方までおりて来ないだろうな」

「どうすればあんなふうにできるかって？ 本人に聞くんだな」

「え？ 空中に浮かんでいられるように、成長を止めているのかって？ そんな噂があるのか？」

そんなことできるわけないだろう」

*そなえあれば憂いなし

海のひとつもないこの町にもたった一人だけ漁師がいる。生まれて以来一度も海を見たことがなく、泳ぎも知らないたまなへ氏は、いつでも漁に出られるように船や道具の手入れを怠らない。

へりくち駅長に面会にきたたまなへは、自分の編んだ網を見せ、駅長の意見を求める。

「あなたが、この複雑な鉄道網のすべてを細部にまで渡って熟知していることは知っています。鉄道網は漁師の網と同じです。あなたのご意見を伺いたい」

たまなへ氏が穏やかにそう問い詰めると、駅長は言い訳をするように答えた。

「駅長には他にする仕事がないですからね。でも、私がすべての鉄道網を知っているというのは間違いです。地下に張り巡らされた路線について、私は何も知りません」

駅長がそう言うとき、怯えたようにプラットフォームへ視線を送ったのを、たまなへは見逃さなかった。たまなへは、仲間に打ち明けるときのように駅長に身体を近づけささやいた。

「この町が海になるという噂をずっと前に聞きました。地下鉄のやつらの計画かもしれないね」

駅長はじっとたまなへの目を見つめ何も言わない。

*みえないサーカス ～ ありけり博士の手記より

毎週、全国から処刑場にサーカスが呼ばれ、彼らは誰にも真似のできない技を演じてみせる。受刑者に後悔は与えても娯楽は与えないようにと、受刑者と舞台の間には分厚いカーテンが引かれ、受刑者は何も見ることができない。受刑者には、カーテンの向こう側のときどき空中で起こる大きな呼吸音や、二人の演技者の腕と足が強くぶつかりあう音、または腕と腕がぶつかり合い絡みつく音、それから空中から落ちるときの風を切る音と地面に激突して体が粉々になる音、そういった空中の技につきものの音が聞こえるだけだ。

*しゅんかんと永えん

処刑場の最前列のチケットを手渡すとき、配達係の少年はいつも何かを言いたそうにしている。へりた氏は最初からそれに気づいてはいたが気づかないふりをしていた。どう話しかければよいのか、お互いに分かっていたいかなかったのだ。

いつもは午後一番にやってくる少年が、その日だけは、夜になってからへりた氏の家のドアを叩いた。少年はチケットの入った封筒を渡しながらか、とても怯えた様子をしていた。へりた氏は、それでもただ少年の様子を見つめるだけだったが、少年はなかなか帰ろうとせず、しばらくためらった後でへりた氏にこう訴えた。

「空に何か奇妙なものがいるのです。危険があるかどうか、確かめてもらえますか」

へりた氏は奇妙なものが何なのか確かめるためにドアの外に出て少年の指差す先に目をやった。それからへりた氏は、あれには全く危険はないと教えた。

「あれは『つき』と呼ばれている。誰もが知っている。人を襲ったりはしないよ」

それでもまだ疑いの晴れない少年は言った。

「あんなに輝いているのにこんなに静かなのは、無害なふりをしているだけかと思いました」

「君は木の葉が人を襲ったという話を聞いたことがあるかね」

「いいえ。そんな話は知りません」

「なら安心するといい。昼間、空には太陽があるが、月は太陽の裏側から伸びた枝についた一枚の葉にすぎないのだから」

少年は驚いたような顔をしたが、へりた氏のことばを信じたようで、怯えは消え、礼を言うように帰っていった。

ドアの前で、閉じたドアをしばらくぼんやりと眺めていると、へりた夫人がどこからか現れてへりた氏の横に立った。その手には、今までへりた氏が持っていたチケットの封筒があり、夫人は封を開けると中のチケットの枚数を確かめた。

「あなた。あんな嘘をついて、いけない人ね」

へりた氏は表情を変えずに問い返した。

「嘘？」

へりた氏にはどこが嘘になるのか分からなかった。

*高げんはまっている

新任の医師みけもの命令で、毎週、週のはじめの天気の良い日は駅から南に歩いて一時間ほどの空踏高原までピクニックに行くことになった。健康に運動は欠かせないと、みけもは妙に甲高い声で主張しつづける。

勿論、一度に全員を外出させることは許可されず、毎回、八名が選ばれ、十名の処刑場の職員が同行した。選ばれるのが八名といっても、いずれ全員に順番がまわってくるのだから、争い

は起きようもなかった。

空踏高原に続く道は険しく、足場も悪い。途中何ヶ所も、転落すれば命を失いかねない難所があり、全員が手を貸し合わなければ高原にたどり着けなかつただろう。

出発するときはそれぞれが違うものを見ていた参加者も、ランチの時間になるころには他の誰かのために生きることを覚え、手にしたサンドイッチを自分でなく身近の誰かの口に押し込もうとして身体を近づけ合ったから、食事が終わる頃にはお互いの身体は癒着し二度と離れなくなっていた。

ピクニックに行った面々が一つの生物のようにくっつきあったまま処刑場に戻って来ると、待ち構えていたみけもは素早く彼らの身体を分離する。引っ張るだけで簡単に引き剥がせる者もいるが、メスで何箇所かに切れ目を入れなくては離れない者も多い。全員が分離されると、職員が改めて点呼を取り、そのとき決まって一、二名が足りないことに気づく。そんなに近くにいなながら、いなくなった者について誰も覚えていないと言う。

みけもはそれを聞くと、仕方ないわね、なんとかするわ、と言って戻ってきた者たちを部屋に帰らせる。

*かくされた真じつ

しのぬの処刑官はいつも、誰にも来訪の予定を告げないまま処刑場を訪れる。処刑官は処刑に立ち会う時間がないほど忙しい。だから、職員の誰にも気づかれぬまま、自分の執務室に入り仕事に集中する。

五六四号室には床に直接書類が積み上げられていて、頂上は天井に達している。ただ人の通る細い道筋は書類が取り除けられ靴ですり減った絨毯が見える。

床に座った処刑官は次々と書類を手にとり内容を吟味したあと、書類の角やへりを啜えて舐める。たまには歯を立てて噛むこともあるが、歯の痕は残さないように気をつけている。おかしい味の断面があれば、それは不正の行われている証拠だ。そんな書類には赤いマジックで印をつけ後で分かるようにする。

*導きのほん

たまなへ氏がいつも着ている漁師服の内ポケットには表紙に海水がにじみ題名も読めなくなっている本が入っている。仕事に疲れたときには、その本を取り出し、まだ見ぬ海のことを

思いながら読むのだが、読むたびに、まさにそのときたまなへ氏が悩んでいることとその悩みの答を必ずそこにみつけ出すことができる。

適当に開いたページには、こんなことが書かれている。

問

月は岩の塊だという噂があるのですが、本当でしょうか。

答

そんなバカな話はありません。岩なら、欠けるときはその破片はどこに落ちてくるでしょう。

満ちるとき、それはどこから集めたのでしょうか。

安心してください。月は植物以外のなにもものでもありません。

問

父の声を思い出すことができません。どうすれば思い出せるのでしょうか。

答

運がよければ564号室に声が残っています。

問

心臓が止まりそうです

答

海では誰でもそうです。

問

目が見えなくなりました

答

処刑場に行けば、いくらでも替わりがみつかるでしょう。

その本をどうやって手に入れたのか、たまなへ氏は覚えていない。都市に行ったときに、公園の蚤の市で手に入れたあの本だろうか。それとも、都市の駅で海への道を尋ねたときに親切な警察官が地図を書いてくれたが、あれは警官が持っていたこの本の表紙に書いていたのではなかったろうか。あるいは、駅前で妙にふくよかな体つきをした女が、通りがかる人に誰彼となく微笑みかけ、そして手渡していたもの、あれがこの本ではなかっただろうか。

たまなへ氏はぼろぼろになったその本を新しいものに買い替えようと思うのだけれども、空踏市でその本をみかけたことはまだ一度もない。

*ひとみのうら側

へりた夫人とその日の愛人が最前列の席に座っていると、周りのでっぷりと太った男たちが取り囲み、処刑の様子が何も見えなくなった。樟脳のにおいをさせた男たちを不審そうに見上げる夫人に対して、一人の男が告げた。

「その男の処刑が決定されました。申し訳ありませんが、ご婦人はお一人でお帰りください。護衛をおつけしてもかまいませんが」

そして、愛人の席にいた若者は太った男の内の二人に両脇を固められ、そのまま処刑台に連行された。

意外にも夫人はその処刑にことその他満足し、あてがわれた護衛をその夜の間、帰そうとしなかった。

*さがし物はここにはありません

一回目の公演が終わり休憩になると、空中曲芸師のふみなは身体の筋肉を延ばしながら処刑場の中をさまよい部屋を探した。自分の探している部屋の番号が五六四号室であることは知っていたが、それが処刑場のどの辺りにあるのかは知らなかった。そもそも処刑場にそんなにたくさんの部屋はないのだが、部屋の番号のつけ方に少しも規則性がなかったので、建物のどの辺りを探せばよいのかさえ見当がつかなかった。

これでこの処刑場の公演も五回目になり、そのたびに少しずつ探検し、もうほとんどの廊下を確かめた。ここに無ければ、他の方法を考えなくてはならないだろう。そう思いつめたとき、目の前に五六四号室があった。ふみなはあたりに人影がないのを確かめてからドアをそっと開いた。

部屋の中は病院の診察室のようだった。机の上のカルテを読んでいるのは白衣を着た女で、医者なのだろう、ふみなに気づいても驚くことはなく、椅子を勧めて一人なのかと尋ねた。それから、まぶたの裏、舌の状態、耳の後ろ、そして脈を診たあと、部屋を仕切っていたカーテンを開いて、そこにあった簡易ベッドに横になるように命じた。

その部屋はふみなの探していた部屋ではなかったのかもしれない。メスを手にした女医は胸にみけもと書いた名札をつけたまま、手術を始めた。

*よくぼうの限かい～ありけり博士の手記より

処刑場のレストランでは、処刑の日以外なら受刑者の姿も見かける。処刑が決まっていることを除けば、受刑者は普通の市民となんら変わりはないのだと公には言われており、それをあからさまに示すかのように受刑者も市民と同じメニューで食事ができる。

定番は目玉のスープで味も一流だ。ただ、たまにスープの中に指や舌が混じっていることがある。それに当たると味は台無しだが、受刑者たちは幸運だと言って喜ぶ。

*あいと憎しみ

ありけり受刑者がこの処刑場に移されたのはずいぶん昔のことだった。その日、新しい受刑者を見るために駅から処刑場までの通りにはぎっしりと人が並び、全員が処刑の旗を振っていたので、ありけり受刑者はこれが歓迎の観衆ではありえないにもかかわらず、歓迎されているのと何ひとつ違わないと感じた。その印象が正しいのだとでもいうように、彼が処刑場の門をくぐるときには、まばらだったが拍手さえ起きた。

それから、ありけり受刑者は処刑までの時間を学問を学ぶために使うことにした。通信教育で大学院を出て『植物としての月の葉脈をめぐる二十三の色素の分類とその活用について』という論文によって学位を得た。それからも研究を続け、今では国立干涉大学の通信教授として研究と教育を行っている。いずれ宇宙飛行士となり、月の葉脈から二十四番目の色素を発見し地上に持ち帰るのが夢だ。

*工さくしつ

それから、みけもは医務室である五四六号室に戻ると、彼らを切り離すときについでに切除しておいた、足首や太もも、尻の骨や肩甲骨などに加え、手術用ベッドの下の引き出しにストックしてある、肺や心臓や神経節など様々な器官を組み合わせ、行方不明者の身代わりを作り上げる。

身代わりは、いなくなった者と少しも似ていないが、そんな違いに気づくものは処刑場に一人もいないだろう。

*都しのほうそく

都市に来てもう一週間になるのだが、たまなへ氏はまだ海を見ることができなかった。海へ行く列車に乗ると、終着駅はうっそうとした森のある山の中だったし、海への門と言われた場所に辿り着いた日には、天候のため通行は禁止されていた。その翌日に行くと、その門はすでに閉鎖され、海に行くことは禁じられていると門番に言われた。

どこか高い場所に行けば海が見えるだろうという話を聞いて、都市で一番高いと言われている塔にも登ったが、塔には窓がなく、どんな景色も見えなかった。

そのようにして一週間が過ぎ、たまなへ氏の前に未だ海は現れていない。おそらく海を見ることなくたまなへ氏は空踏市に帰らなくてはならないだろう。

誰かが、どんな望みであれ都市に行つてそれをかなえることは難しいと助言してくれたのに、それを真面目に聞かなかったことをたまなへ氏は後悔していた。

*ゆめで会いましょう

ふみなは、子供の頃に父親と一緒に旅をした町をよく夢にみる。

父親はジャグリングの名手で、無数のボールと一緒にふみなを投げ上げ、ふみなは空中ブランコと父親の間を、たくみに行き来する、そんな芸を見せていた。

客の少ないときは、父親は似顔絵も描いた。子供の頃には都市の名のある親方の元で数年間修行をしたという父だったが、ふみなの見るかぎりあまり上手な絵とは思えなかった。それでも父親の描く人物画はどれもやさしくて、ふみなは好きだった。旅から旅の生活だったこともあり、ふみな自身の絵や父親の自画像は、一枚も残っていない。

それだけでなく、父親の声も、ふみなにかけてくれたやさしいことばも、なにひとつふみなは思い出せなかった。

*みいだされた者

へりた氏の専門家としての意見では、少年の才能は疑いようがないという。

今すぐ、都市のしかるべき親方の元で修行をさせればひとかどのものになるだろう。

ただ、処刑場の配達係として僅かの賃金を貰い生活している少年に、それは難しかった。

へりた氏は、それでも少年がよりたくさんの素晴らしい作品に触れられるように、画集を与えたり、美術館に誘ったりし、やがて少年も芸術に興味を持ち、自分で絵を描くようにさえなっていた。

「そうだ、君にまだ見せていない作品がひとつある」

へりた氏はそう言うと、少年に鍵とメモを渡し明日の昼前にメモの場所に行きなさいと言った。

*いれ替えられたみらいとかこ

メモには「五六四と五四六を入れ替えること」と書かれていた。廊下の突き当たりの二つの部屋のドアには、それぞれ五六四と五四六というプレートがぶら下がっていた。少年は少し伸び上がり、プレートを外すと入れ変えた。ドアに何か当たったのか、錠をあける音がしてドアが開かれた。

部屋から顔を出した女は血のついてまだ乾いていない白衣を着ていて、室内からは消毒薬の匂いがした。少年は服の内ポケットから手紙を取り出して渡した。

*ちいさきことはよきこと哉

配達係の少年が手渡した封筒はただのダイレクトメールだった。それも、旧式の心臓拡張器の安売りのどぎつい色使いの広告が一枚だけ。

心臓拡張器は、処刑場ができる以前から存在した。水を飲みすぎたり、あまりにも孤独になりすぎたりすると、心臓が縮んでクルミのように硬くなり動かなくなってしまう。心臓拡張器はその治療のために発明された原始的な装置だった。だが今ではそんな病気にかかる者はいなくなり、固有の病名も失われてしまった。

雨の日には、急行列車の最前列や、遊園地のだれも乗っていない観覧車の中で、宇宙では、月に近づきすぎた宇宙飛行士がよく発病した。

*罪なきことば～ありけり博士の手記より

処刑場の事情に通じた人物の話によれば、どの処刑場にも必ず五六四号室がある。どんな処刑場であれそんなにたくさんの部屋はないのに、その部屋の番号だけはどこの処刑場でも同じになっている。

処刑が近づくと必ず、受刑者は五六四号室に送られる。そこで過ごす時間はそれぞれで異なるが、それまでどれだけおしゃべりな人間であったとしても、その後部屋から出てくると何も口をきかなくなり、それは処刑まで続く。誤解をあたえないために補足すると、処刑の後、口をきく者は勿論一人もいない。

それだけでなく、彼らと話をしたことがある者もまた、その後、彼らの声を忘れてしまい、彼らの話したことのすべてを思い出せなくなる。受刑者の生み出したすべてのことばが、奪い去られているかのようだ。

*ばらいろのじん生

へりた夫人の愛人が次々と罪を犯し有罪になり、何故か全員が必ずこの町の処刑場に送られて来ることは、地元の空踏新聞でもときどき取り上げられる。疑惑はいつでも人気のある話題なのだが、こと真相については誰も確かなことが分からない。へりた氏にそんな権限は与えられていないのだし、そもそも、へりた氏は夫人の不倫など想像したこともないだろう。他にそんなことが誰にできるだろうか。

*あなたのけん康をいのります

処刑省の通達によれば、受刑者には処刑以外の死は許されていない。それでも、受刑者の何人かは決まって処刑の恐怖のためか、処刑の前に心臓の発作を起こして死んでしまう。みけもは、そのような死者に対して憤りを感じ、処刑までは決して一人として死なせないと決意していた。

処刑を前にして死んだもの達を解剖すると、死因は決して心臓が発作を起こしたためではなく、心臓が縮んでクルミほどの大きさになり、それとともに動きを止めてしまうからだだった。

広告の心臓拡張器は旧式で、装着すると心臓との間にわずかに隙間が残る。そのため激しい運動をすると、全身の血液がその隙間から体外に放出されてしまう。処刑場では受刑者が激しい運動をするのは脱獄のときだけだから、それは欠陥というより好都合な機能ということになる。みけもは、心臓拡張器を受刑者の数だけ発注し、受刑者全員の心臓に順番に処置していった。

計画していた手術をあと一人で終えようというとき、どこで数え間違えたのか装置の数が一つ足りないことに気づいた。とはいえ、高名なありけり博士ならば心臓発作で処刑を免れようとするはずもない。最後の一人である博士には処置は必要なしとして、全員の手術が完了したと、医師みけもは報告した。

*しん実のきろく

書類の山の下には時々、小さい音声記録装置が下敷きになっていることがある。誰が何のために録音したのかは分からないが、かつて処刑されたもの達の声がとりとめもなく記録されていた。

しのぬの処刑官はそれを見つけると、処刑官に支給された頑丈なカバンの底に仕舞い込む。本部へ持って帰れば不正書類を二十一枚見つけたのと同じ報奨金を受けられる。

処刑官は記録装置がカバンいっぱいになると、書類の確認もそこそこに、膨れたカバンを大事そうに抱えて処刑場を出て都市に戻る。

駅長の見るかぎり、駅で都市行きの特急に乗る処刑官の荷物は、毎回小さくなってゆく。地下鉄が荷物の運送も始めたのに違いない。

*ふり出しにもどる

ふみなは、手術台の上で目覚めた。もしかしてと思い、声を出して自分の名前を呼んでみたが、自分の声は確かに聞こえた。ここは本当の五六四号室ではなかったようだ。

では、何の手術だったのだろうか。ふみなは、自分の腕や足や腹を探ってみたが、なくなっているものはひとつもなかった。

*ありけりと私

ドアにためらいがちなノックの音がした。ありけり博士はそれが配達係の少年だと分かっていた。

ドアを開くと、恥ずかしそうに封筒を差し出す少年がいた。

博士は、その大判の封筒を受取ると、すこしだけチップを渡した。少年が礼を言いお辞儀をしたとき、ズボンのポケットから小さなノートのようなものが床に落ちた。ありけり博士が拾い上げ、手にとってみると、それはハガキサイズのスケッチブックだった。

少年の許可をもらい開くと、どのページにも赤一色で、さまざまなものが描かれている。「私も子供の頃は画家にあこがれていたものだよ。数年の間、都市で修行をしたこともある」そう言ってスケッチブックを返したが、絵については何も言わなかった。残念なことに、少年に絵の才能はないようだった。

* うつくしき天ねん

鍵を回すとドアは自分の意思を持っているかのように静かに内側に開いた。分厚いドアだったが、少年が力を加えるまでもなく開いた。空腹を思い出させる甘く酸っぱいかおりが少年を包んだ。少年は室内に進んだ。

少年の頭のすぐ上で息を吸い込む音がした。見上げると、高い天井のすぐ下に作られた鳥の止まり木のような足場に、ブランコをつかんで空中に飛び出そうとしている少女がいた。あれほど高い位置にいながら、その息を吸い込む音は、すぐ目の前にいるかのように聞こえた。二つの円弧が天井の真下で交わった。ブランコに逆さまにぶら下がった男の腕に、少女の足が音を立てぶつかった。そして、少女の乗っていたブランコは無人となって離れていった。空のブランコが止まり木にもどると、別の女の身体を運んでまた半円をえがく。そして、今度は、天井に近づく前に、逆さまになって大きく振り回されていた少女は、人形のように軽々と空中に放り出された。少女の小さな体が、縮まって丸い塊になり空中で三度回転し、また少女の体に戻った。

ちょうどその位置に追いついたブランコと女は、力を失い落下するだけになっても空中に留まろうとする少女に手を伸ばす。二人の腕は二匹のお互いを求めあう蛇のように絡みつき、しゅるしゅるという音を立てつながった。

その瞬間、少女の身体から赤いものが生まれ、世界を侵食し始めた。

まず、バケツいっぱい真紅のペンキが天井にぶちまけられ、一瞬で真っ白な天井が赤く変わった。ブランコのピンクの横木が、そしてそれに掴まっていた女が、赤く変わった。少年には、その女の驚いた顔がはっきりと見えた。口を大きくひらき、理由を見つけたら、そのまま吸い込んでしまおうとでもいうように、大きな口を開き、少女の身体を見つめていた。そして、次の瞬間、少年の見ていたすべての世界が真紅に変わった。もはや世界に赤以外の色は存在しなかった。冷たいものが、額から目の中に流れ込んだ。頬を伝い、口の中に沁み渡った。

細く風を切る音が、はじめは微かに、そしてすぐに大きな音に変わり上から近づいてくる。なにかに捕まろうと伸ばした指が空気を裂いていた。熱を帯び赤くなった耳が、耳介の複雑な形の溝に空気をめぐらせ、笛の音を響かせる。音は大きくなり続け、少年の目の前で止まった。

落ちてきた少女の身体は少年と同じくらいの大きさで、曲芸の訓練の賜物か、あるいは空中ですべての血液が飛散してしまっていたのだろうか、水分を失い骨格と筋肉だけとなった肉体は、床に当たると陶器の人形のように砕け、破片があたりに飛び散った。それは世界と同じように真っ赤に見えたが、少年は死体がそんなに乾いていることに驚いた。

少年は上を見上げてもないのに、あのブランコの女が大きな口を開けたまま、その表情が恐怖から悲しみが変わってゆくのが分かった。女の口はゆっくりと「ふ」「み」「な」という形を作った。少女の名前にちがいがなかった。

そのとき、分厚いカーテンの向こうからたくさんの拍手が聞こえた。サーカスだとばかり思っていたが、これは死を売り物にしたショーだったのだろうか。サーカスの人たちが、床の上に散らばった少女の欠片を集めて走り回っていた。

少年は、自分の目の前に落ちているゼンマイ仕掛けの装置を拾った。みたこともない機械だったが、肉の破片が付着していて、間違いなくその装置も少女の身体の一部だとわかった。その装置を見ると少年は自分の身体がそれまで知らなかった反応をしていることに気づき、頬を赤くしながらその器械を自分のポケットに仕舞い込んだ。

*かい流のはじまり

プラットフォームに地下鉄の駅への通路ができていた。駅長はその通路の前にバケツやモップを置いて、だれも通れないようにした。それでも、いずれ街中に地下鉄駅の通路が作られてしまえば、こんな抵抗にはなんの意味もなくなるだろうことは分かっていた。通路の奥からは、電車が入ってくることを警告するブザーの音が聞こえている。

*何もしらないままに

真っ赤な世界の絵だった。

へりた氏はその絵と少年を都市の親方の元へ送り出した。費用は自分が払うことにした。少年にはその価値があるだろう。

少年と絵を載せた列車を見送ったあと、はじめてへりた氏は自分が少年の名前を知らなかったことに気づいた。

*まちのせい活 ～空踏新聞日曜版 より～

機械工のしくまが旋盤のまえて倒れていた。工場長の命令で仲間三人に連れられて医者に運びこまれた。何の異状もなかったが、今では見かけることのない旧式の心臓拡張器が心臓に取り付けられていることがわかった。その話を聞いた工場長は目に涙をうかべ、しくまの肩を抱きしめた。

動物園の森ネズミが檻の金網を破って逃げ出した。そして一週間後に、町の生ゴミ集積所で見つけだされた。食べ物に不自由しなかったためか、子供くらいの大きさにまで育ち人の言葉を話すようになっていた。動物園の檻にもどされても、いつまでも群れに馴染まなかった。

公園の奥にある広葉樹の一本がいたずらにあい、倒されていた。手当を受けてしっかりと植え直されて一月もすると、どの葉も肉付きがよくなり、近くで見ると人の手のように見えた。さらに半年もすると、公園に群れていた野犬の姿を見なくなった。

駅の外に並んでいるベンチについて、駅の利用者の間に噂が立っていた。

いわく、座ると妙に温かいような気がする。空気の冷え切った夜でも。

いわく、あたりに人影がないのに、いやらしい手つきで触られたように感じた。

いわく、ベンチに名前をよばれた。

いわく、ベンチが直立し歩いていた。

誰かが駅長をからかおうとしているのは明らかだった。

*きょくしよてきなしゅう末

誰も気づいていないようだったが、たまなへ氏は町に海のおいが漂うようになったことに気づいていた。毎日、夕方になれば波の音も聞こえる。

町を歩くと、数メートルおきに、小さいドアが作られている。そのドアの向こうには地下鉄の駅があるんだと、若者が言いながらそこに消えてゆく。たまなへ氏はそんな場面を何度も見た。

はやく駅長に報告すべきだと思っているのだが、背中に背負った綱が、地下鉄の駅への入口のドアノブにすぐにからみついてしまい、たまなへ氏はすこしも前に進めない。

こんなときにどうすればいいのか、本に尋ねたいのだけれど、本もまた背中の中網にからまってしまい、手に取ることができない。

駅はまだ屋根も見えない。